

ケニアの児童文学——植民地時代以前

アセナス・B・オダガ

岡田瑛子 訳



植民地時代以前のアフリカの社会では、口承文学という形式の文学が唯一の文学で、ケニアに住むさまざまな人たちの間に伝えられてきた。それはそれぞれの社会の若い人たちに教育を施し、生活の知恵を教え込み、社会の一員として訓練する重要な手段の一つとして大切にされてきた。

いろいろなジャンルの話を聞かされて、若者たちは自分たちの部族が抱えている近隣の部族に対する感情とか接し方を学び取ることができた。それは時には憎悪となり敵意を抱き、時には好戦的になり、また時には寛大で

友好的、隣人愛に満ちている場合もあった。歴史的、経済的な倫理、あらゆるタイプの社会問題に、美的評価とその他の文化的価値を加味して具体化したものが民話であり、それが文学の中心を形成してきた。アフリカ土着の文学としての口承文学は、アフリカの人々の日常の出来事を取り上げてその社会のイメージを造形し、さらにアフリカの世界の明確な姿を描き出した。

また口承文学の中には、ことわざ、なぞ掛け、昔ばなし、迷信、タブー、伝説、神話といった形式の中に隠されている歴史的事実も収録されている。また彼らの世界

観の中に含まれて、人生哲学も口承文学の中にはつきりと描かれているのだ。

主としてこういった形のもので構築された複合体が口承文学であり、口誦による伝達・観察・模倣といった形で後世に受け継がれていった。

口承文学の一部門であることわざは、会話や昔ばなしの中で使われたり、単に話のポイント（急所）を示すため、あるいはことばや文の意味を強調するために使われることもあるが、アフリカの社会ではことわざが単独で使われることはほとんどない。これから述べるルオ族の場合も例外ではない。

若者や子供たちは大人たちが日常の会話の中でことわざをどのように使いこなしているかをじっくり観察すること、ことわざの使い方や意味の判じ方を覚える。ことわざの中には、日常頻繁に使われるものもあれば、特殊な場合にしか使われないものもある。

母親が好んで子供たちに言ってお聞かせることわざの一つにこんなものがある。

「お腹いっぱい食べた男は、自分のイモが焦げてしまふのをジッと見ているだけでイモに手を下そうとしなない。そうやって蔵いっぱいイモですっかり失くしてしまふのさ」こう言って母親は、たらふく食べるしか能わない、仕事の手伝いもせず、いたずらで不作法な振る舞いばかりしている子供を諷めるのだ。

死とか病気のために身体障害者になったといった突然の不幸に見舞われた人は、見舞いにやってきた人たちにこういつて慰められたり励まされたりした。「いつもいつも、温かくて気持ちの良いベッドの真ん中で寝られるとは限らない。時には壁ぎわの隅とか固くて冷たいマットの端で寝なくてはならないこともあるものだ。人生なんていうものは今の状態がずっと続くとは限らないのだ。人間の運などというものはいつ何とき、良くなり、悪くなるかも知れないから」と。「この世は三日月形の鎌のようなものだ」「夜明けが来る数の方が羊の毛よりもはるかに数が多い」これらは、人生において人間に

は良い時も悪い時もあるという事を言う時に使われることわざである。このようなことわざは、自分とか近親者にいつ何が起るかわからない、だからどのような幸運にしろ不幸や災難にしろ、いつ自分にふりかかってきても大丈夫のように、つねに準備をしていなさいという心がまえを促すために使われたのだ。

ことわざと関係の深いものに、なぞ掛けがある。実際ルオ族では、なぞ掛け、ことわざ、たとえ話とか隠された意味を持つ格言などを総称してンゲチェ (Ngeche) と呼んできた。

なぞ掛けは子供や若者がエンタテイメントとして、お互いの知恵比べとか頭の回転の鋭さを競い合う場合によく使われた。子供たちは誰がいちばん多くなぞ掛けに答えられるかを競い合うのだ。ルオ族のなぞ掛けをいくつか次に紹介しよう。

最初にある人が「ミナイエ」(Minaye) と声を掛ける。するとほかの連中が「クウィテ」(Kwithe)

と合の手をうつ。すると最初の男がなぞを掛ける。誰が答えてもかまわない。

Q 二人の老人がじつと見つめ合ったまま立っている。でも絶対にお互い触れようとしない。これ、だあれ？

A 大地と空。

Q 道を切り開きながらどんだんのぼって行く、そんな丘ってなあに？

A 皮をむきながら、どんだん食べちゃうサツマイモのことさ。

Q 目を大きく見開いて、一日に二回、赤い部分を出すもの、なあに？

A 太陽だ。朝、昇る太陽と夕方沈む太陽は真つ赤だもの。

Q どんなによく切れる鎌でも絶対に切ることのできない長い長いヘビって、なんだ？

A 河だ。

Q どこにでもついて来て、私のする通りに何でもする私の奴隷ってなんだ？

A 影ぼうし。

シャレや早口ことばも子供たちに親しまれている。誰にでもより早くしかも正確に言えるように、繰り返し早口ことばを繰り返した経験がある。その場合よほど気をつけていないと、もっともっと早くと繰り返しいるうちにうっかりナンセンスな発音をしたり、猥褻な言葉や口にしてしまつて大笑いになったり、ひどくからかわれてしまうこともあるのだ。

とてもややこしい例を紹介しよう。

「Acham tap chotna malando, chotna cham tapa malando.」

(わたしは 恋人の茶色の陶器茶碗で食べた。恋人はわたしの茶色の陶器茶碗で食べた)

「Ji dhi chaomo ng'op Omoth Omoth, ng'op Omoth Omoth ogore piny.」

(みんながオモス・オモスの無花果の実を食べるところだ。オモス・オモスの無花果の木が倒れたからだ)

「Thiriri, ywak nyatawo. (ンヤタウオ [鳥の名] が果てしなく鳴いてゐる)

歌も子供や若者たちの間で広く親しまれている。子守歌や子供の遊び歌の他にも、結婚披露宴の歌、労働の歌、ビアパーティでの歌、葬式の歌、神やご先祖の招魂の歌などがある。恋愛の歌や讃歌は現在のポップスのようにその時どきで流行があり、しばらくは脚光を浴び人気があつても新たな歌が創作されたり、編曲されると消えて行った。

ルオの人びとの間ではこれらの歌はそれぞれ土着のミュージシャンたちによって作られ、オルツと呼ばれるルオ独特のハーブか、一般に普及しているニヤチチという八弦の竖琴の伴奏で歌われた。そのほかにも少女たちが自分のボーイ・フレンド(チヨデギー)のために作つたり、若者たちが恋人や結婚したいと思う相手を讃える歌を作つたりした。以下は、若い男性がガール・フレンドとの体験を歌にしたものだ。

ぼくたちはいつしよにいた、あの寒い夜。
いつしよにいたら、雨が降ってきた。

いっしょにいるのを暗闇が見つけた。

アセムボの娘さん、ぼくは君を愛している。

君の美しさは、まるで天女のように。

二人つきりしていると、ライオンが咆えた。

二人つきりしていると、鳥がくうくうと囀^{さえず}った。

豹が、ぼくたちのすぐそばで唸^{うなり}った。

暗闇が立ち話をしているぼくたちを、すっぱり呑

みこんだ。

ぼくの愛^{いと}しい人よ、オモロの妹よ、

君の美しさは、君への愛はぼくを狂おしくする。

子守歌は、母親やアヤ（子守女）が赤ん坊とか幼な子をあやしたり寝かしつけたり、泣くのを止めさせるために歌う。子供たちは小さい頃から子守歌を覚え、成長してからはたくさんの子守歌を歌えるようになる。昔からルオの子供たちは成長過程に応じて一時期、幼い弟や妹、親戚の子供たちのめんどうを見る手助けをさせられた。母親が他の用事をしているほんの短い時間であったとしても。

今日でも子守は子供たちの仕事である。そしてこれは、若者や子供たちが受けるインフォーマルな形の教育でもあるのだ。子供は大人のマネをしたり、空覚えをしながら実地に子守歌を覚えていくのだ。

よく歌われている子守歌を一つ紹介してみよう。

ねんねんよ、おばあちゃんのためにねんねしな。

ねんねんよ、おじいちゃんのためにねんねしな。

ママがおっぱいくれるよ、ねんねしな。

パパが牛乳つくってくれてるよ、泣かないで。

かわいい坊^{ぼや}や、ねんねしな。

おばちゃんが抱いてあげよう、ねんころり。

ことわざ、歌、子守歌などほとんどのものに共通して強調されているテーマは、お互いにいたわり合い思いやりをもたなくてはいけないということだ。紹介した子守歌では多くの黒人共同体社会に共通の大家族制度の概念が強く歌い込まれている。

すでに述べてきた歌のほかに、共同体社会にとってき

わめて重大な歴史上の戦争や自然災害のような出来事が、時には隠喩を交えながら歌に歌い込まれた。人生における神秘な力とか、病氣・疫病・飢饉・生殖・誕生、死によっての個々の人間に終止符を打つ永遠の時間の回転なども歌い込まれた。歌には人びとの世界観、信仰、宗教が歌い込まれた。子供や若者たちは楽しくこれらの歌を歌い、やがて大きくなるにつれて、歌を理解するようになった。そして歌に隠されている意味まで解くことができるようになった。

踊りは口承文学の中の視覚的な分野であり、子供や若者たちは伝統文化の多くをそこから吸収した。

民話は子供や若者たちによく親しまれていると同時に、植民地支配以前の社会で極めて重要な役割を担^たっていた。民話は、通常の芸術的創造性とか審美的要素を満たすだけでなく、聞く人たちに伝えるべき倫理というものをもっていた。同時に人びとを教育し教化するという、さわめて重要かつ貴重な役割を果たしていたのだ。

「民話は一つにはその娯楽的、教育的な価値によって

口承文学の中でも最も重要な最も親しまれているジャンルであった。

神話や伝説と異なり、民話では自然現象の説明や歴史について触れることはない。むしろ日頃なれ親しんでいる事を扱ったり、昔の風習を思い起こさせたりする。民話はなによりも毎日毎日の出来事を基本に据えているので、ほとんどが日常生活と深くかかわっている。子供たちはずいぶん道徳的な教訓を民話から得ているし、民話のほとんどが困難を克服して勝利を得るといったハッピーエンドになっている。部族共同体の連帯感、勤勉、協調性、誠実さといった美德が多くの民話に描きだされている。同じように人間の弱さ、愚かさ、失敗などいろいろなことを子供たちは民話に耳を傾けながら、学び取るのである。民話とは本質的に教訓的であり、道徳的なのである。

ほとんどの民話は子供向けに語られるが、若者向けのものもいくらかあり、たまには大人だけを対象にしたものもある」(オシッティ著『土着の教育』七三―七四頁・一九七二)

物語というのは、しばしば動物たちが人間と同じように暮らしていた、はるかに遠いずっと昔の、ある場所を設定して語られた。物語は、共同体社会の中でのめごとや不和を避けるための実に賢明な助言であり、手段なのだ。それゆえ物語のあるものは、社会の構成員についての話であり、悪い人間が自分の姿とか行動が動物に形を変えられて皮肉られているのがわかる。それでもはつきりと名指しで、露骨に批難されるよりはずっとマシなのだ。もちろん、大昔の遠い国のお話……ということになったとしても、特定個人との類似点が多かったり、同一の性格の出来事が叙述されていて、誰のことを言っているのかみんなにわかってしまうこともある。このような物語は、その社会において何が善で何が悪なのかを明確にし、その社会の規範とか慣習を徹底し定着させるのに役立った。

「子供たちは神話・伝説・民話・ことわざ・なぞ掛け・民謡・詩そのほかの口承文学に耳を傾けながら、いろいろ

ろのことを身につけていくのだ。民話の中からはそれぞれの民族の人生観とか世界観、歴史、知恵、道徳的メッセージなどが深い泉のように湧いてきた。このような精神面での啓発・高揚に加えて、口承文学には娯楽と気晴らしの効果もあるのだ」(前掲書オシッティ「土着の教育」一〇三頁)。

これから紹介する民話では、ハイエナを騙して家畜の牛を奪い取ったオシン・オシンは、人間としての友人、親族、あるいは兄弟にもなり得た。そして従兄弟、共同事業のパートナーとさえなり得たのだった。

オシン・オシンとハイエナは親しい友達で、同じ屋根の下に住み、ほとんどなんでも共有して暮らしていた。でもオシンは不誠実でずるいヤツだったので、全部自分のものにしたいと考えた。そこで、ある日ハイエナと共有の牛の群れを牧草地に連れていった時、牛のシッポを全部切り落として地面に突き刺した。そのあと牛の群れを森の真ん中へ連れていき、隠しておいた。そうしてから泣き叫びながら家へ帰り、ハイエナを呼んで、大地が

話がある。

ルオの伝説によると、人間の最初の先祖を創ったのは、ンヤカラガという神さまだった。彼らは何年も何年も二人だけで、果実を採ったり、モロコシとか他の野生の穀物を収穫しては食糧にして生活を営んでいた。どうしたら子供を作れるのかは、全く彼らにはわからなかった。男はセックスの欲望を、女の膣ではなく腋の下を使って満たしていた。

ある日、男が穀物倉の側で坐っていると妻がモロコシを取りにやってきた。女は木の皮で作った腰巻と山羊の皮の上着を身にまとっていた。高床式の穀物倉に女が登っていった時、男が見上げると女の膣が目についた。それはピンク色で湿っているようで、女の体のほかの部分とは全く異なっていた。男は逸物の部分が刺激されて何ともいえない奇妙な感じにおそわれた。男の逸物は勃起した。女が穀物倉からおりてきた時、男は穀物倉の下で女と性的交渉をもった。

この最初の出来事があつて九ヶ月後、男の子が生まれ

牛をみんな呑みこんでしまつてシッポだけが突き出ていると言った。二人は惨事の現場へ急いで駆けつけ、なんとか牛を取り戻そうとシッポを引っぱりはじめた。ハイエナはたいそう悲しんで、シッポを束にして抱え、家に帰った。一方、オシンの方は「しめしめ」とほくそ笑んでいた。それはそれとして、その後たびたび、オシンは自分の従兄弟の一人に世話を頼んでおいた家畜の様子を見に森にでかけていった。その様子がうさんくさいので、やがてハイエナは信頼していた友人に裏切られ、ぺてんにかけられたことに気付いた。オシンとハイエナは動物界の長老たちの前で、延々と続く裁判にかけられたあげく、その友情は悲しい結末を迎えることになった。

このような話では、友情や共同体における仲間意識がいかに大切かということ強調すると同時に、仲間同士がお互いに尊敬し合い、お互いの財産を尊重し合うことの重要さを教えているのだ。

民話の中には、神話や伝説も含まれる。ルオの伝説には、素朴だがきわめて魅力ある、人間の起源についての

た。もちろん、それから幾度となく二人の間で肉体交渉がもたれた。最初の男の子のあとにまた男の子が生まれ、それからさらに何人も男の子と女の子が生まれ、一族を形成するのに十分な数になった。子供たちが結婚できるくらいに成長した時、ンヤカラガは、それぞれに夫や妻を授けた。このようにして人間は繁殖し、その数を増していった。そしてその時以来人間は、良いこと、悪いこと、さまざまなことを知るようになったのだ。

もう一つの神話では、ケニアのルオ族が分裂して、南部スーダンから旅をして現在の地に住みつくようになった経緯が語られている。

むかしルオという部族の先祖に、ラモギとニイビルという、部族長の夫婦がいた。二人の間には、ポドーとアルアという男の子をはじめ、おおぜいの子供が生まれた。ラモギが死んだ時、ポドーがその跡をついで部族の長になった。ポドーは長男だったし、部族長として執り行い、また心得ていなくてはならないさまざまなことを父

から教え込まれていた。アルアの方は、広々とした原っぱで自由に狩猟をしたり、家畜の番をするのが好きな青年だった。ある日、一族の者たちが住んでいた大きな家のある敷地にゾウが迷い込んできた。ちょうどその時アルアは家にいた。いまこそ自分の狩猟のすばらしい腕前を見せる機会がやってきたのだ。早速アルアは神社の境内に駆け込んで、代々部族の長に伝授されてきた刃幅の広い槍をもってきて、ゾウをめがけて突き刺した。アルアは槍の名人だったが、不幸にしてゾウに致命傷を負わせることができなかった。ゾウは背中に槍を突っ立てたまま、森の中へ逃げ込んでしまった。

ポドーはこの知らせを聞いて不機嫌になり、弟のアルアに槍を取り戻してくるよう、厳しく言い付けた。その槍は部族の長の護身用の魔法の槍だったのだ。長老たちは、なくなった槍の代わりにほかの槍を使つてはと、ポドーに懇願したが、ポドーは聞きいれなかった。そこでしかたなくアルアは、槍を探す旅に出た。部族の長と兄の命令に背くことは部族の一員として絶対に許されないことだったのだ。

翌朝、一番鶏が鳴くとアルアは、固型ウガリ（トウモロコシの粉を練ってふかしたケニアの主食）と焼いた肉、それに酸化した牛乳をヒョウタンに詰めて出発した。暗くはじめじめした淋しいジャングルの一人旅は怖かったけれども、アルアは巨大な木の下を通り、水の氾濫する河川を渡って、どんどん歩いて行つた。そんな辛い苦しい旅を何日も続けたあと、やさしく声をかけてくれる老婆に出会った。そしてその老婆が見せてくれたたくさんの槍の束の中から、五日間もかけて苦勞してお目当ての槍を探し当て、それを老婆の家へ持って行つた。そして家へ帰る時、老婆はこの世の物とも思えないすてきな模様と色をした、とても高価なビーズの宝物をくれた。

アルアがジャングルから戻って数カ月たったある日、ポドーの子供の一人がビーズの一つを飲み込んでしまった。アルアにとって兄に復讐できる時がやってきた。アルアはビーズを返すようにポドーに申し入れ、他の人の説得には耳を貸そうとはしなかった。ビーズを取り出すためには、ルオの慣習に背いて、自分の子供のお腹を切り開くという、とても恐ろしいことをしなくてはならな

かった。ポドーは家族ともども悲嘆にくれていた。やがて死んだ子の喪に服す期間が過ぎた時、ポドーはラッパを吹き鳴らして部族の頭領たちを全員呼び集め、顔をそむけたまま、ビーズを弟に手渡した。そして今後は二度と兄弟で目を合やすことはあるまいと、誓うのだった。二人の兄弟の間の亀裂は、もはや修復できない、決定的なものとなってしまっていた。ラモギの二人の息子が、部族の長という神聖な家柄に泥を塗るというような、ご先祖様に面目ないことをしてしまつたのだ。二人は、どのように霊験あらたかなる浄めの儀式と呪い（まじな）を執り行つたとしても浄めることのできない、極悪の罪をおかしてしまつたのだ。彼らは血のつながりという固い絆をずたずたに引き裂いてしまつたのだ。

二人はもはや、一緒に暮らすわけにはいかなくなつてしまった。そこでポドーを支持する人びとは、ポドーに従つて東南の方角へと旅にでた。またアルアを支持する人びとは西を目指して旅立ち、ナイル川を渡つた土地に住みつくようになった。つまり、ある者はケニアに、他の者はウガンダに定住するようになったのである。そし

て前者が現代のケニアに住むルオ族であり、後者がウガンダに住むアチヨリ族とアルル族、ランゴ族、それにバドーラ族になった。

この神話にはいくつかのバリエーションがあり、アチヨリ族にも全く同じ神話がある。

この神話は南部ルオ族の歴史と結びついている、というのも現代の歴史学者によるとルオ族は南部スーダンのどこかが出身地で、ナイル川に沿って移動してきたからだ。そして結局は今日の居住地に落ち着いたのだ。ウガンダのもう一つのルオ族の人たちも同じ歴史をもっている。

この神話の教訓は、いやしくも長たる人物は、一般の人びと以上にほかの人たちと協調し、目下の人を許すことを学ばねばならないことを教えている。つまり族長に与えられている強大な権限のゆえに親切とか思いやりとか理解の心がなければ、人の上に立つ者はやもすると高慢になりがちであり圧制的な最悪の独裁者になってしまうからだ。

ここではっきりと私たちに示されていることは、物質（偏重）主義とか個人主義が人間性に優先して尊重されると、その社会は必ずバラバラに崩壊してしまうということである。また復讐心とかお互いを許し合うことを拒むような態度は、直接の関わり合いのある者だけでなく、概して人間というのはそれぞれの側に与して対立するので、その集団全体を巻き込んで不幸や困難を招くことになるのである。

神話や伝説はほとんどの社会に存在する。ンゲーギ・ワ・ジオンゴはその小説『川を隔てて』の中で予言者でもある伝説上の人物ムゴ・ワ・カビロについて語っている。ムゴは白人が到来するずっと以前に、白人の到来を予言できた。

ルオの間でも、ルワンダ・マゲレとか、ゴル・マヒア、オコレ・チエンゲ、ラララとオウォル・カボクといった伝説上の人物の話がある。そしてルオの子供たちは小さいうちからこういった伝説上の人物の行ないを聞かされて育ち、やがていつか自分たちもそういった偉業にありたいかと思いつきながら成長するのだ。若者たちが見習おと。しかも心優しくて妻や子供たちをいたわり、他人にも何かと思いやりがあり、その結果、彼らの苦難を救うとたいへんな努力をしたり、一命を賭して共同体社会を擁護する情熱を持っていたのだ。

このように見えてくると、植民地時代以前の、文字の存在しないアフリカ社会においては、口承文学が最も有効かつ有効な文化であったことがわかる。それは、若者たちを教育し、さらには社会の秩序を維持するのに大きな効果があった。また子供にも大人にも楽しめる大切な娯楽でもあったのだ。

前植民地時代の口承文学は人びとの思考力を刺激し、それを作った人、それを不朽のものにした人たちの人生のほとんどあらゆる局面を視野に収めて語られた。

さまざまなジャンルを通じて、子供や若者たちは世の中についての情報を得、同時に周囲で起こる自然現象の説明の提供を受けるのである。

口承文学はその社会全員の共有財産である。文字化された文学とは違ってそこには差別的な傾向は全くない。社会の構成員の誰もが口承文学の中に入り込むことがで

うとするのは、こういった土着の英雄たちなのだ。

こんなゴル・マヒアの伝説がある。ある日、仲間たちと狩りの酒宴から帰ってくる途中、家からはまだ遠く離れていたが、キプシギスの戦士たちの大軍と出会い、道を完全に塞がれてしまった。ほかの狩人たちがどうしたらよいかを相談している間に、ゴル・マヒアは素手で敵と戦い、全く寄せつかなかった。そして他の狩人たちを救った。伝説上の英雄ゴルは、ある強力な魔力をもっていてどんな生物にでも変身できたとし、また自分の姿を見えないようにすることもできた。

この伝説はルオの若者たちに勇気があるのは良いことであり、社会もこういった勇敢な戦士を褒め讃えるのだから、ぜひ自分たちも大きくなったらこのような立派な戦士になりたいと思わせるためのものである。どの社会にもリーダーがいるが、そのリーダーたちは、たいいていの場合、おばあちゃんの昔話、神話、伝説を熱心に聞いた少年少女たちの間から生まれるのだ。ゴル・マヒアとかその他の伝説の英雄たちは、少年たちが憧れる理想の男性像を提示した。勇敢で恐れを知らず、大胆であるこ

きた。みんながそれぞれに共同体社会の中で重要な役割をもつと考えられたからである。

口承文学を通じて、個々の人間は社会が自分に対して抱いている期待というものを知らされた。言いかえれば、これまで述べてきたようにインフォーマルな教えの多くが口承文学を通して若者や子供たちに伝達されてきたのだ。

前植民地時代の伝統的なルオ社会の若者や子供たちは、自分たちの社会のイメージだけを手本にして成長した。彼らは自分たちの社会に固い信頼を置いて育ち、自己を築き上げ彼らの尊厳と彼らの文化遺産に対する正しい認識を養った。植民地支配者たちがその影響力でその大部分をめちゃくちゃに壊してしまったのは、このアフリカのイメージであり、尊厳と自信なのだ。そして今、かつてと同じように、歪められた記録を正すために口承文学が使用されなくてはならないのだ。文字のなかった社会において、また今日の社会でも、口承文学が演じるきわめて重要な役割は世界中の学者や多くの国々の間でますます認知されるようになってきた。

「おとぎ話が自由、希望、充実感といった基本的な心理的要求を満足させるものであるとするならば、伝説は子供たちをその社会に適合させるものである。それゆえ教育心の旺盛な編集者は、社会政治的な含みをもった物語を選択し、そして神話であると同時にどのような行動をとることが望ましいのかという行動規範を子供たちに教え込んで子供たちに自分たちのバックグラウンドに適應できるようにさせるのに役立つような物語を選ぶのである。民話は昨今では空想力を喚起することよりもむしろ現行の社会的価値観に将来の市民たる子供たちを適合させる手段となってきたりして、学術の対象を超えたものになりつつある。これらの本を読んで子供は歴史的・地理的バックグラウンドに則った自分を見るのであり、同時に普遍的な色彩からは完全に逸脱したと思えるような奇妙な愛国主義的な趣向が生まれるのだ」(オシッティ「アフリカの土着教育」七三頁)。

口承文学とは過去の産物ではない。ましてや博物館の棚やファイルに陳列される化石のようなものでもない。

ケニア共和国では多くの民族グループの間で、口承文学は現在もなお生き続け活動している。毎日のようにたくさんのお話者が作られているが、一方、テクノロジーの発達によって多くの物語が失われているのも事実である。

いやもつと正確に言うならば、物語の多くはたえず新しい開発に適應され、新しい局面を吸収し続けているのだ。アフリカ文化の指導的立場にある学者の一人で、今は亡き故オコト・ピテックの言葉を引用しよう。

「夕方になると、私たちはゆったりとしたソファに腰をおろしてティーテーブルに足を投げ出しながら話し合ったものだ。『土着語による文学はいかにも少ない』。そしてアチエベやショインカの本や雑誌『トランジション』を引き合いに出した。

その時農村一帯では屋外で火が焚かれ、民話が語られ、遠方では月光の踊のドラムが響き、美しい恋の歌が風について漂ってくる。若者は乙女に逢い、才気縦横のはじけるような恋人たちの語らいが白熱していた。ああ、誰かが喧嘩している。夫をめぐる妻たちの争いか、父と息子か、母と娘か……。そして結婚式ではナン(nanga)の

祈りが執り行なわれている。列席者は花婿を讃える歌を歌い、新しく親族となった花嫁側に親しみを込めた侮蔑の言葉を投げかける。

偶然にも、物語、ダンスなど伝統的社会でエンタテイメントの役割を果たしているものはすべて夕方行われることが多い。夕食後、または夕食の支度ができのを待っている間に男と女と子供たちはくつろいで物語に興じたり、お互いになぞ掛けを仕掛け合ったりできるのだ。昼間は物語にふけっている時間など誰にもなかった。こういった理由は抜きにしても、真つ昼間に物語するのはタブーであった。子供たちに昼間物語をしてやれば、子供たちの成長が止まってしまうというのだ」

ここ数年来、現代の文字文学に対する口承文学の影響がますます明らかにされてきている。そして多数のアフリカ人作家がこの伝統をさまざまな形で作品に利用している。

アフリカの著名な小説家の一人、アチエベは、彼の出身部族の人びとのことわざを、例えば作品『部族分解』、『もはや安楽なし』『神の矢』といった彼の小説の中で、

ふんだんに利用している。同じように著名なもう一人の作家、ングー・ワ・ジオンゴもこの本の中で前に述べた、彼の部族の神話と伝統を作品の中で活用している。ほかにも、タバン・ロリヨングのような作家は、現代の論争的な思想を表現する手段として、口承文学の物語を語るテクニクを利用しているのだ。

口承文学を荒廃から救うためには、より徹底した努力がなされ、すべてのジャンルにわたりこの伝統を、公認の技術と方法論にのっとって、注意深く記録し、体系的に収集しなければならない。この目的のため、すでに何人かの人が英語やスワヒリ語だけでなく、それぞれの言語で民話やことわざを記録するという仕事に着手している。『東アフリカの民衆文化』という本がタバン・ロ・リヨングによって編集され、ケニア・ロングマン社から一九七二年に出版されたが、この本は東アフリカの人びとのあらゆる形式の口承文学が収録されている。その原典はナイロビ大学文学科の学生によって集められたものである。

パメラ・コーラはルオの民話を集めて英訳し『なぜ、

どうして、いつ、東アフリカものがたり』という三冊の本にした。キクユ族のピーター・クグルとナンディ族のウィリアム・キビエゴン・ボルエットも自分の部族の民話を集めて出版した。これらの物語は小学校の児童に最適であり、補助教材として広く読まれている。

もっと高度なレベルでは、ムビシ博士の『アカムバ族の民話』とR・ゲコウの『キクユ族の民話』がある。ゲコウの著作はたいへんよくできていて、それぞれの作品に詳細な分析を加え、さらに民話の中にでてくる時代、場所、性格描写、規則、習慣に至るまで解説されている。G・バラは『キクユ族、ことわざ百撰』を著し、S・オグダ・コキリはルオ族の民話を詩の形で書いた二冊の本『むかしの物語』と『ジャングルの星』を出版した。この本の著者はまた、ケニアのほとんどの部族の口承文学について多大の業績を残している。

こういった人びとは、散文形式の物語を韻文にしたコキリ以外は、植民地時代以前の自分の部族の文学を、特に明白な修正を加えないで原典のままで記録している。この点タバン・ロ・リヨングは一步前進させている。彼

は、自分の部族、アチヨリ族の民話を現代風にアレンジして二冊の本『フィクション』と『食事中の族長』を出版した。しかしながら、タバン自身は口承文学を社会的背景に結びつけて考えようとする試みを拒絶すると言いつつ、同時に彼は特定のいくつかの社会から同じ話を収集したことを認めているのだ。物語の一つにサルとニシキヘビは仲の良い友だちであり、ある日サルがニシキヘビの家を訪れていった話がある。訪問した日については口承版では、一切ふれられていないのだが、『フィクション』の中でタバンは、つぎのように言っている。

“サルは、そのクリスマスの日にニシキヘビの家を訪問しようとして……サルは手を洗いにいく。手は汚くて黒い……。真つ黒になった手はなかなかきれいにならない……石けんを使ってみた……”

本来、少なくともわたしの知っている版本ではサルには手を洗う理由はなかったし、さらに食物は首の細くて長い壺に入っていてサルは手が届かなかった。タ

バン版では、食事は皿にのせて出されている。言いかえるとタバンは物語の筋に現代風な味つけをし、それを新しいものに創りかえ同時に人種や肌の色による偏見を表面化するためにそれを利用しているのだ。

創造力豊かな作家があちこちに手を加え古い言い回しを新しくすることで民話に活気を保持しつづけさせることができないというもう一つの例が同じ本の六二頁にある。

“ジュムベは出かけていき、帰りにはその屈強な背中にはバス一台分ほどの大きな豆の袋を担いで戻ってきた……”

原作では、アピティが穀物倉の屋根ほどの大きな豆の袋を担いでいたことになっている。

タバンの著作では物語と韻文を用いて物語を再構成した。したがって原作は修正され新しい要素が加えられているのだが、オリジナリティと価値観、テーマ、筋書きは元のまま残されている。民話を韻文形式で書き改める

ことの効果は、とても言いつくせない程大きい。

民話とは他の口承伝統のジャンルと同様、現在も生きており、社会的に十分機能している。したがって新しい社会の発展に合わせ、今、求められるものを満たすため、語り手たちは民話に新しい事実や今どきの名前を使うことによって民話を豊かにする必要がある。そのおかげで若い読者は民話を理解しやすくなるからである。

たとえば、初期版では「ハイエナは義理の母親を料理しようとして、大きな陶製のナベでお湯をたくさん沸かした」となっていたのが、今日ではハイエナはスチールのドラム缶でお湯を沸かすことになっている。お湯を沸かす目的も、物語の底流にある倫理感も変えられてはいないのであるが。

口承文学の素材はもともと文字による書物という形で、娯楽読物として、さらには学校用の教材として利用されるべきである。

“植民地時代の開幕”は、ケニアでは十年も前に終わりを告げたが、今だに地方の図書館や読書室や本屋までが外国の子供たちのために作られた植民地宗主国の本で

いっぱいである。そういった本のケニアへの輸入はずっと続けられており、古い本も新刊もケニアにあふれている。本の輸入が継続している事実は、ケニアが大きなマーケットとして利用価値がある証拠である。それらの本は、青少年少女たちにとってすぐにでも手に入る便利さがあり、こうした状況は一朝一夕に変えることは難しいと思われる。しかしながら、今こそできるだけ多くの自国の文学を本にして刊行するためにみんなが力を合わせて努力すべき時なのだ。事実こうした努力は若者たちに愛国心を芽生えさせ、ナショナリズムの精神を養うことを狙いとする、われわれの独立の歩みを推進する努力の一環であるべきである。このことはケニアの人びと全体のケニアにおける状況と感情、そして志向するものを描いた、われわれ自身の国についての文学を読むことによって、はじめて達成されることなのである。

(口承文学研究家)

(おかだ えいこ・児童文学研究家)